

調査スクープ!

敦賀湾原発銀座

「悪性リンパ腫」

多発地帯の恐怖!

最終「福井県庁のみなさん、
疫学調査をやってください」



連続し回つたる調査報告はひとまずこれで終わるが、もちろん問題が解決したわけでもなんでもない。さらなる原発の増設も噂されているこの地方にとって、むしろこれからが正念場だろう。それは、ひいては電力を大量消費している大都市の住民にとっても正念場と言えるかも知れない。われわれ日本人は、今まさに歴史的な選択の岐路に立っているのである。

ルポライター／明石昇二郎・西村浩一／本誌特別取材班

振り返ってみて、我々がや
ったことといえば、ジャーナ
リストとして噂か「事実」で
あるか否かを確かめるべく調
査をした……ただだけのことであ
った。しかし、そのことは我
々の希望をはるかに上回る妻
まじいばかりの「問題提起」
だったようである。

集約的に悪性リンパ腫患者が
発生しているという事実が温か
かび上ってきた。そこで、
我々WPB特別取材班は、日
本原電・関西電力などに対し
、今回の調査で得たデータ
の、住民のプライバシーに関
する情報以外の部分を提供
し、コメントを求めることに

を感、頼りたしなとあり、日本原電・敦賀原子力発電所の半壁（約）を圍内（敦賀市・美浜町・可賀村にまたがる区域）における住民全戸聞き取り調査の結果、原発の風下地域で

ところで、関係各位のコメンツを紹介する前に、先週の記事でも紹介した、当方が行政に対して幾度となく公開を要求し続けていた調査結果の分析に必要なデータ（集落別

人口および集落単位の年齢階級別人口）の件に触れておこう。

当初、県の機関である敦賀保健所は取材に対し、「データは出せない」と言っていたのだが、連載開始後、敦賀保健所の上部機関である福井県福祉保健部が「年齢補正」（年齢調整死亡率）のデータ

のことで当方にクレームをつけてきたため、「データを出さないでおきながら、ケチをつけてくる」とはおかしい」ということで再度、敦賀保健所にデータを公開するよう要求したところ、一転、敦賀保健所は「データはない」と言い出した。県の対応は、やはり不誠実なものであると言わざるを得ない。

最終回のこの原稿を執筆している日月4日現在、河野村と美浜町に関しては「データ

は提供して」とのお言葉もいたっていた。だから、なぜか教育市だけは頑として公開を拒んでいる。ちなみに、このデーター、住民のプライバシーに触れるようなものではない。教育市が公開を拒む理由には次のとおり。

「年齢階級別ではなく、年齢ごとのデーターならある。ウチ以外には（教育市内の集落単位のデーターは）ないのではない。ただ、あるにはあるが、コンピュータの中。わざわざコンピュータに指示してまで（データーを）出すという

福井県当局

まずは別ページのカコミを見てほしい。これは日本原電が11月15日付で編集部宛に出した「抗議文」の全文である。関西電力からも同様の抗議文が届けられているのだが、この抗議文の中で述べられている「一報吉一」とは、筆者が担当編集者向けに作成した内部資料のことであり、記事掲載・週刊朝刊に当方が好意で同社に提供したものである。すでに公表された記事に

ことまではやらない。すでに（コンピュータから）出している教習市全体でのデータなら見せるか、これはどう使っているか、捨てようと思っただけの勝手。なにも気にしてもしゃわなくて結構」（教習市市民課・磯見幸一課長）

言うまでもなく、市全体でのデータを提供していただいても、今回の調査・分析においてはまったく意味がない。この場を借りて再度、教習市に対し集落単位のデータを公開するよう強く求めておくことにする。

「おかしな話」

対する「抗議」はともかくとして、先週号で紹介した我々の調査データがまだ掲載されていなかった段階で、しかも好意で提供したものに對してまで「抗議」してくるというのだから理解に苦しむ。

また、当方か「報告書」に対するコメントを求めた際、両社はこんな「コメント」を出していた。

「特にこれについてあまり申し上げるわけにはいかない。

福井県当局の“お手つき”

た内部資料のことであり、記事掲載・週刊前に当方が好意で両社に提供したものである。すぐに公表された記事に、両社はこんな「コメント」を出していた。

「特にこれについてあまり申し上げるわけにはいかない。

昭和61年度
丹生漁港電源立地促進対策交付金事業
船揚場施設
美浜町

れる以前(の)11月18日、記者会見を開いて出稿集部に「なんの折衝もなく、全くノーコメントを公表してしまふ」(以下略)と述べた。それから、調査区域(内)では過激な悪性リンパ腫になつた例しか確認できなかった(以下略)の件」(「福

「アンケートした学生の資質も問題」

当方に対する一抗議活動として一際目を引いたのが、なんといっても福井県当局によるもの。この連載記事が「県民を不安に陥れる」というので
 問題があるのではないかと
 などといった、名著毀損モノの質問まで含まれている。ちなみに、この「ジャーナリスト専門学校」の件に關しては

ある。11月11日、栗田幸雄・福井県知事が記者会見で怒りをあらわにした後、抗議文がその日のうちに集英社まで届く。

本誌編集長名で次のように文書で回答する予定である。

「新聞社やテレビ局が行なう世論調査などでは、学生調査

けられ、その数日後には県の「公文書」として（抗議文に係る指摘事項メモ）なるものが果英社まで送られてきた。その中には、「医学的なアンケート」を（日本）ジャーナリスト専門学校の生徒等がとるものについては正確性の点か

から、「日本ジャーナリスト専門学校」の学生たちは調査の手法を実際に学んでいる者たちである。さらに、病名を最終的に判定する作業は、ジャーナリストである明石、西村の2名が自ら直接行なっ

おり、記事でも書いてあるとおり、あやふやな情報はすべて除外してある」

※

A black and white portrait of a middle-aged man with dark hair, wearing thick-rimmed glasses, a white shirt, and a dark tie. He is looking directly at the camera with a neutral expression. The background is plain and light-colored.

ないう000ぐらいの人口でやると、集団が小さいから統計的にやっても意味はない。アンケートした学生の貧賤

我々は栗田県知事に取材を申し送った。すると「知事は多忙とのことで、代理として県福祉保健部部長の米澤邦夫氏と、健康増進課課長の河原和夫氏が対応してください」となった（11月22日）。

河原課長は語る。

「問題は、統計学的手法をまったく無視されてることと、小さい人口集団、それに尽きる。なぜ年齢補正とか統計的

処理をしなかったのか。

悪性リンパ腫は、国際疾患分類で『その他のガン』というところに含まれる、それだけ稀なガン。

私は讃南地方で年齢補正して統計処理したが、全国平均と全然変わない。あなた方

年齢構成がわかったとしても、分母（つまり、人口）が小さいから、そこでやられてもまた違う結果というか、間違った結果が出ますから」米澤部長が続く。

「おたくの調査したこれ（調査区域内の患者数）が間違ひ

219

言うかも知れない。けれども、

①年齢・浦正などの統計的处理

をしていない
②母集団が小さい
③学生が調査したデータが科学的に信頼できるのか
というのが県の抗議理由だった。そして、当方の「疫学調査」をされるつもりはないかとの問いに、米澤部長と河原課長はやる必要はない」と言い切った。

認められる。個々の細胞レベルでは、人の細胞とムウサキツユクサの細胞の放射線に対する感受性はほとんど同じ。だから、人にさういういらないことが現れても不思議ではない。

高くて、このうち、この中で、年輪の
浦正に、これは意味がないと、
言うかも知れない。けれども、
僕が心配なのは、例えば、イ
ギリスの場合、セラフィール
ドの近くとか、その他の原子
力施設の近くでは、年輪構成
が非常に高くても比較的若い
人に集中的に発生する傾向が
見られる。この場合も、若
年層の率は人口比では少な
いけども、そういう人たちに
出ているんじゃないかと、とい
うのは、放射線に対する感受性
は明らかに若年層は高くな
るからです」

低線量の放射線でも人体に危険が及ぶことを指摘したことで世界的に知られる埼玉大学理学部の市川定夫教授からも、我々が行った調査に対

かも近年になるほど数値が明確に上昇傾向にあるということから言うと、明らかに増加傾向にあるということは言える。

関係があるのではないか、あるいは関係あるであろうという推論がなし得る——ということと言える。

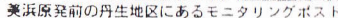
それから第3点は、調査結

するコメントを頂いた。

ひとをついつのデータについてはどうこう言えないという、単年度ごとのデータというのはあまり信用できない。だけど、今回、貴方たちがまとめでおられるように、過去何年間というところでデータをとる、当初は全国平均とあんまり変わらないか、むしろ少なかったのか、だんだん年を追うことに増えてきていて、し

それからもうひとつ、悪性リンパ腫にしろ白血病にしろ、原発から出てきた放射性核種（核物質の種類・編集部注）に起因するものであると特定することはできない。これはガンなどの晩発性障害の「宿命」。個々のケースについて断定はできないが、ひとつの傾向として、10³〜10⁴範囲内で増えてきているということになれば、合理的な推定として、

果ては敦賀半島でなく、原発の
対岸地域で患者の発生が多い
ということだが、私自身も 80
年代の初めに敦賀市の委嘱を
受け、若狭湾周辺で 4 年間に
わたりにムラサキツユクサの花
びらの観察をしたデータの解
析を行なったことがある。解
析の際、対岸地域ではかなり高
い頻度で突然変異が発生する
という結果が出たが、今回の
調査結果もこれとの類似性が



せて8名の患者発生数のうち、3名が20歳未満、20代、

苦行と化した調査活動の最中、敦賀半島対岸地域のある家で、中年の女性がこう言つて取材を拒否したことがあつた。

るためにも、ぜひとも嶺南地方における疫学調査を実施していただきたい。なぜかという、当編集部には連載開始直後から、嶺南地方にお住ま

「こういうことは、きちんとしたところ」がやる調査でない」と、週刊誌の人にはちよつと話せない」

「私の周辺でも悪性リンパ腫が多い」という情報や、果ては嶺南地方の医療関係者の

解説するまでもなく、彼女
の言う「きちんとしたところ」とは
敦賀市なり福井県なり国
なりの「行政」のことである。
特に、我々に反論・抗議をし
てきた福井県庁のみなさんには、
は、自らの「主張」を裏付け

「これは以前からあった話なんです」という情報などが続々と寄せられてきているからである。つまり、我々がこんなレポートを発表する以前から、この地域では「健康不安」を感じている人々が多く存在

ひとまず連載はここで一度終えることにする。だが、我々らの調査活動はまた続けたわけでは無い。行政が情報を開示し、調査区域内で得られたデータに対して疫学的検討を加え、その結果を読者のみなさんに報告できた時が本当の意欲味での「連載終了」となるかどうか。

最後に、ある温井県民の方からの手紙の一面を紹介して締めくくりとしたい。

「……これは勝手なお願ひですが、温井県の抗議に対する反論もさることながら、日本の海岸線はどこもかしこも原発から日常的に放出される放射能によって汚されているのだから、敦賀・若狹だけの特

殊な出来事ではないということと、敦賀・若狭を観光で訪れながらといっている病氣になるようなことではないこと、原発問題を本当に真剣に考えなければならぬ責任があるのには都市の人たちであるということとを付け加えるなど配慮していただければ、この記事に反発を感じている温井県民も納得するのではないでしようか。

抗議文

今般、貴社編集により発刊された週刊「ブレイブ」第四週第11号から致賀電原金銀座「悪性リンパ腫多発癌部」の掲げ！」と題し、特定地域の白血病の発生などあったか、も原子力発電所の立地と因果関係があるのかとき印象を記者に与える記事の連載が開始されました。また、11月8日には貴誌特派記者明石屋一郎記者が来社し、週刊「ブレイブ」(「鶴の馬」)報告書に対するコメントを求められました。

この地域の白血症の

発症所の立地に因果関係があるか
のごとき、印象を讀者に与へ、一般
住民の健康不安をいたすににお
りたるこの記事になっていることか
らここに強く抗議するとともに、
直近号において訂正を求めます。

以上

平成6年1月1日
日本原子力発電株式会社
常務部長 橋本達也
(橋本達也君)